

自治体間連携で生み出す新たな選択肢

まちとまちがつながり、双方が豊かに



1万人が踊る 東京高円寺阿波おどり

JR中央線の高円寺駅南口には、昔ながらのアーケードの商店街があります。そこを、学ラン姿の二男くんが物珍しそうにアーケードを見上げながら歩いていました。いつも大勢の買い物客で賑わう商店街ですが、今日は一際、賑わっています。

そのうち、笛や三味線、太鼓などの鳴り物に合わせて、編み笠を被った踊り子たちが現れました。二男くんは下町生まれの江戸っ子ですから、ついつい踊り出したくなりました。「ヤットサー、ア、ヤットヤット…」二男くんは、東京高円寺阿波おどりの会場に迷い込んでしまったようです。このお祭りは、約60年前か

ら始まり、今では約1万人が踊る夏の風物詩となっています。

「こんな賑やかな街は大好きだ。どんな自治体なのか、調べてみよう」二男くんは、ちよつと小躍りしながら、南阿佐ヶ谷にある杉並区役所へと向かいました。

着実に進行する 少子高齢化

踊りで興奮した表情の二男くんでしたが、区役所の職員は苦笑いしながらも、区政資料室に案内してくれました。さっそく、二男くんは、資料の棚から『杉並区人口ビジョン』と『杉並区まち・ひと・しごと創生総合戦略』を取り出し、読み始めました。

まずは『人口ビジョン』です。

杉並区の人口は、戦後、増加を続けてきましたが、1975（昭和50）年をピーク（約53万9千人）に減少へ転じました。その後、1997（平成9）年を底（約51万2千人）に再び増加に転じ、2017（平成29）年には過去最高の約55万9千人に達しました。

人口構造（日本人のみ）は、年少人口（0～14歳）が1970（昭和45）年の18・8%から2017（平成29）年には10・5%へ、高齢者人口（65歳以上）は1970（昭和45）年の6・3%から2017（平成29）年には21・5%へと変化しており、少子高齢化は着実に進行しています。

また、人口の将来推計では、区の人口は2060（平成72）年には約

46万5千人にまで減少するとともに、人口構造は年少人口が10・0%へ、高齢者人口は27・8%に変化していくと予測しています。

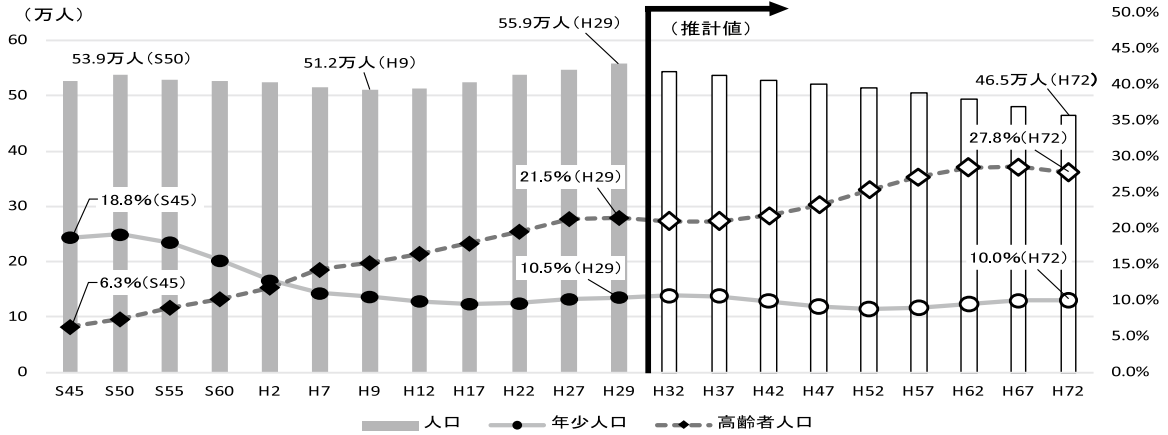
人口増加の主な要因は 転入超過

杉並区の合計特殊出生率は、2005（平成17）年の0・71を底に上昇に転じ、2016（平成28）年には1・03となっていますが、近年、区の人口が増加している主な要因は、転入超過によるものです。特に若年層で転入が転出を大きく上回っています。

しかし、日本全体で人口減少が進めば、区に転入してくる若年層も減少していくことは避けられません。また、今後、仮に合計特殊出生率が



■人口の変化と将来推計



向上したとしても出産する女性自体の人口が減少していくことで出生数も減少していくことが考えられることから、杉並区も人口減少とは無縁ではありません。このような状況の中、出生率の向上を図るとともに、人口構造の変化へ対応していくほか、選んでもらえる、住み続けてもらえる魅力の高いまちづくりを行っていく必要があります。

これらの取り組みは、減少していく人口を各自治体で奪い合うのではなく、地方と連携を図りながら、いわゆるゼロサムではなくプラスサムの視点で進めていくことが必要です。

「こんな活気のある自治体でも、人口減少の懸念があるんだなあ」

二二男くんは、少し不安を持ちながら、『総合戦略』を取りました。

三つの視点で基本目標

『総合戦略』では、人口ビジョンや区の実情を踏まえ、三つの視点に沿って基本目標を設定しました。

視点1は、「区民の結婚・出産・子育てに関する理想や希望と現実の差を解消し、安心して子どもを産み

育てられる社会を実現することにより、人口流入に頼らず、区自ら人口を維持、増加させる力を育てる」です。基本目標1は「若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる」と掲げました。

同区は、2016（平成28）年度に待機児童解消緊急対策を実施し、2千人以上の保育定員等を確保しました。今年度も引き続き保育施設を整備し待機児童解消に向け精力的に取り組んでいます。

視点2は、『住みたい』『住み続けたい』住宅都市としての魅力を高める一方で、『訪れてみたい』まちとしての魅力を高め、にぎわいを創出する」です。基本目標2は「来街者を増やし、まちのにぎわいを創出する」としました。

全国的に有名な観光スポットはありませんが、先ほど二二男くんが見てきた東京高円寺阿波おどりをはじめ、阿佐谷七夕まつりなど、区内各地域で行われるイベントとの連携・コーディネート等の支援や観光マップ等によるPRを行い、区の良さを魅力を発信し、区外からの来街者の誘致を目指しています。なお、



杉並区と関わりが深い台北市及び新北市で行われた「東京高円寺阿波おどり台湾公演2017」

2017（平成29）年には、中学校野球親善交流などで関わりの深い台湾の台北市や新北市で「東京高円寺阿波おどり台湾公演2017」を開催しました。

そして、杉並区を中心とするJR中央線の区内各駅周辺のイベント・観光スポット・ひと・まち等のいわゆる「中央線文化」を観光資源とし

て集約し、SNSや新聞広告等を用いて効果的にPRすることにより、区への持続的な集客も図っています。

地方の資源を活用し、 区民の生活を豊かに

視点3は「地方の活力維持と区の将来にわたる発展が一体不可分である」という認識のもと、交流自治体と



特別養護老人ホームエクレシア南伊豆の建設現場を視察する増田寛也顧問(左)

の連携をさらに発展させ、双方が活性化される新しいひとの流れをつくるとともに、地方の資源を活用し区民の生活をより豊かにする」です。基本目標3は「地方との連携により、豊かな暮らしをつくる」としています。

「視点3」を読んで、二三男くんは「おや？」と首を傾げました。

「地方の資源を活用して、区民の生活を豊かにするってどういうことだ？」

新たな住まい方の提案

『総合戦略』を読み進めると、「新たな住まい方の提案」という項目が目が止まりました。多様化する区民ニーズに対応し、地方での暮らしに興味・関心がある区民を対象に、生活に必要な情報等を提供し、地方での暮らしを支援するというものです。

一つ目の施策が、「南伊豆町との連携による特別養護老人ホームの整備」です。

静岡県南伊豆町は元々、子どもの健康に最適な地として、区の健康学園が開設された地です。これをき

「お試し移住」の説明会にはたくさん区民が参加した



かけに、区立小学校の移動教室や保養施設の利用など、多くの区民が南伊豆町を訪れ、お互いの絆を深めてきました。東日本大震災の後、2012（平成24）年には災害時の相互援助協定も結んでいます。

そうした中で、特養ホーム整備のきっかけになったのは、南伊豆町にあった区の健康学園が2011（平成23）年度末で廃止され、その跡地活用の検討が始まったことでした。区は2012（平成24）年度から10

年間で特養ホームの定員を新たに千人分増やす計画を立てていましたが、区内では土地を確保することが困難でした。一方、南伊豆町でも特養ホームの入所希望者はいましたが町単独で特養ホームを整備するのは難しかったのです。

そこで、両者の思いが一致しました。前例のない都県境をまたいだ自治体間連携によって特養ホームを整備することが決まりました。

区民にとっては、居住の選択の幅が広がります。住み慣れた区内の特養ホームに入るか、それとも、気候が温暖で自然が豊かな南伊豆町の特養ホームに入るのか。もちろん、受け入れる側の南伊豆町にとってもメリットがあります。例えば、特養ホームの入居者の家族が訪れて、現地で温泉や観光を楽しむことで、地域経済への効果も期待できます。また新たな施設ができれば、雇用も生まれます。

建築上の規制などから整備地を健康学園跡地から南伊豆町の町有地に変更し、今年3月、特別養護老人ホームエクレシア南伊豆（定員90床）が開設されます。杉並区から50人、南



伊豆町など1市5町から40人の入居が予定されています。施設内には入居者に面会に来た家族が宿泊できる部屋も整備されています。

南伊豆町の「お試し移住」を杉並区が支援

南伊豆町との連携事業には、「南

伊豆町『お試し移住事業』への参加支援」があります。

「お試し移住」とは、町外の人が同町に一定期間（1週間〜5年間程度）滞在する中で、町の魅力に触れ、地方の豊かな生活を体験してもらおうとする同町の取り組みです。

杉並区は、事業説明会や現地見学



「総合戦略」の担当顧問 増田 寛也氏

増田寛也氏は2016（平成28）年9月1日に、「杉並区まち・ひと・しごと創生総合戦略」の担当顧問に就任しました。

増田寛也氏は、総務大臣や岩手県知事、日本創成会議の座長を務め、地方分権や高齢化、人口減少問題に関して優れた知見と識見を有しています。また、これま

で区が進める自治体間連携による特別養護老人ホーム整備や交流自治体との連携事業の取り組みについて、かねてから注目していました。2015（平成27）年には、杉並区長と東京圏の介護問題などをテーマに対談も行ってました。

そうした経緯から、杉並区のまち・ひと・しごと創生総合戦略における少子高齢化や急激な人口減少に歯止めをかけ、まちの活性化を図る取り組みを充実したものとするため、顧問として、杉並区の総合戦略全般にわたって必要な助言を行っています。

お互いが活性化する取り組み

会の開催などを通じて、「お試し移住事業」への区民の参加を支援するとともに、参加者の現地での豊かな暮らしにつながるよう、南伊豆町の資源を活用した健康づくりや生きがい活動などについても検討します。40〜60代の区民を対象にした杉並区の調査では4割を超える人が地方移住を、「行ってみたい」（11.7%）、「どちらかといえれば行ってみたい・興味がある」（29.5%）と答えています。二三男くんは「移住したいとは思っても、実際にはなかなか踏み出せないと思う。杉並区がこういう選択肢もあるよと示して、支援してくれたら、心強いだろうな」と、こうした施策を興味深く読みました。

という視点が必要です。杉並区は、地方創生を自らの問題として正面から受け止め、将来にわたって地域の活力を維持し、持続可能な財政運営を確保するために、『総合戦略』を策定しました。

二三男くんは「都市と地方がお互いの行政課題を解決することで、お互いが活性化する、どちらの住民も豊かさを享受できることが必要だ。南伊豆町の特別養護老人ホームや『お試し移住』などの新たな住まい方の提案は、双方にとってメリットのある取り組みだね。杉並区民にとっては居住の新たな選択肢が増えて、南伊豆町との二地域居住を可能にする。南伊豆町にとっても単独では整備できない特養ホームを整備でき、杉並区民が町を訪れてくれることで経済効果も期待できる。まちとまちがつながることで、お互いが豊かになれるって素晴らしいな」と感じました。

さあ、勉強したら、急にウズウズしてきました。お祭り好きの二三男くんは再び、小躍りしながら、阿波踊りが続く高円寺へと戻ってゆきました。